トラック3川遊び
＊昨晩お話した川に行きます、朝は尺の都合上カットです。
ここは背景の音を楽しむパート
前半は昔を懐かしむような、後半は無邪気に楽しんでいる様子です

「…この山に二人で来るのも何年ぶりだろ
こう懐かしんでると、何だか大人になったなって感じがするよ」

「ふふっそうだった、兄さんはもう大人だったね（楽しそうに）」

「思い出すなあ
昔はこの山道で転んだ私をおぶって
よく家まで連れて帰ってくれたよね」

「い、今はもうしなくて良いよ
私も重たくなったし」

「ってそんなことはいいの！
そっそれにしても空気が澄んでいて心地良いよねぇ」

「この辺りの風景も変わらずそのままで」

「なんだろう、私たちだけが大きくなって
まるでタイムスリップしてきたみたいな感じ、わかる？」

「だよね！」

「なに？景色？
あーそうだねぇ、もうすぐ着くし少しだけこの空間に浸ってようか」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～川に到着

「わぁ！やっぱり今も水が綺麗だね！」

「それに……冷たっ！」

「…ちゃんと水も冷たいです」

「でもこんな体験、都会だと中々出来ないよ、ねっ！…」

「ってもう！兄さんもそんなところに座ってないで遊ぼうよ！」

「やめとくって、せっかく来たのに・・・

そんな事言う兄さんには…こうです！」

水をかける

「どう？冷たいでしょ？」

水をかけられる

「あっ、ちょっと！急にやめて！（楽しそうに）」

「もう、兄さんたら…

いや煽ったのは私ですけど、今日は水着じゃないんだから加減してよ」

「ふぅ、やっと笑ってくれましたね」

「東京から帰ってきてからずっと、

疲れ切った顔してたから心配してたんだよ？」

「そりゃあ分かりますよ、
私の兄さんの事だからね！」

「あ、いや…やっぱり今の無しで…」
ほ、ほら！兄さん、カブトムシです！」

「あーそう言えばまだ虫って触れる？
都会に慣れると抵抗とかあると思って」

「まあそうだよね、やっぱり触れなくなっちゃうもんか…」

「私は触れますよ、ほら」

「はしたないって、何をいまさら昔よく捕まえてくれたじゃん」

「ほらっお返しで…あ、飛んでっちゃった」

「子供みたいって…もう！馬鹿にしてー」

「そんな兄さんも今は子どもと変わらないよ
急に水をかけてくるなんて、そんなこと立派な大人はしないって」

「でも、此処に来ると子供に戻っちゃうのはわかるなあ
だってこれだけ昔のままだとね、仕方ないよ」

「それにしても…やっぱりのどかで良いところでしょ？」

「…すこし張り切り過ぎたね、そろそろ家に帰ろうか」

「あっ、兄さんちょっと・・・いや、やっぱり何でもないです」

「さ、おんぶして下さい

・・・冗談だよ。ちゃんと歩くから」